

人間形成における

自己実現の構造

成蹊大学 日比行一

まえがき

この学会の第31回大会（昭和44年）での課題研究のひとつが「青年期（高校段階）の自己実現のための課題」であった。いうまでもなく、それぞれの報告者の要旨はそのときの「発表要旨集録」に、また部会報告は会場での討論も含めて、まことに手際よくブリーフ（会報566）にまとめられている。

しかし、この課題研究のとりまとめ、そして司会も担当した者として反省してみると、「自己実現」を自明の目標とし、とくに人間形成の目標が自己実現であるということを担当者自身が勝手に極めつけてしまっていたようである。その後、当時の報告者、討論者、研究部での担当者と話しあう機会があったが、自己実現の実体がもうひとつはつきりしない。どうした場合に自己実現と看するの、どのようにして青年を自己実現へ働きかけるの、なぜ自己実現でなければならないのかということになる、どうも納得のできる対応がでないものである。研究不足といわねりまでも不用意な姿勢であったと認めざるを得ない。

その後、多少はこれらの問題について読書もしまえてもみたので、ひとつの試論としてまとめてみたい。（なお、このまとめにあたっては、報告者、討論者、研究部からの担当者になにかと示唆をいたしたいというので、謝辞とともに付言しておきたい。）

自己実現ということ

自己実現の用語上の諸概念は、一般にマズロウ、K.H.に負うところが多いようである。マズロウによれば、生理的欲求、安全の欲求

という欲求の系統性の最上位にある自己実現欲求に基づくのであり、それは青年期以後に生じてくるものであるという。この欲求を前提として、周知のように彼は自己実現をしている人びとの特徴を5つの規準で示している。逆説的にいえば、自己実現とはその欲求の充足がこれらの規準の状態にあることであり、人格（パーソナリティ）形成にかかわる目標群ともなっている。さらに、これらの規準をすべて実現できるあるいは充足することは理想としてのみ追求できる最高目標にとどまるものであるともいう。この限りでは、これらの規準はそれぞれに自己実現とつながっており、規準の相互関連性は、その組みあわせによる無限の自己実現が可能であり、個別的に存在することになる。しかも、この規準は極めて普遍的な価値を内包しているもので、個人が実際に生活している社会の現実的な価値と対応させなければならない。そうすると、すべての人は、それぞれに自己実現をしているのであって、どの場合も自己実現であって、どの場合も自己実現でないという区別は不可能であり、何れも自己実現であるものが定まらなくなってしまうという自家撞着的なものになる。

心的現象や事象の法則性を分析的に追究し、発達や価値の目的や規準を追求し、パーソナリティの理解のためのキー概念を理論的に構築するという心理学的接近によって、自己実現が規定されたとしても、自己実現そのものを教育上の目標、人間形成目標に置きまえてしまうとこに自家撞着が生ずるのではないだろうか。それを選ばようとすると、真の人生とは自己実現の過程であるとか、人生の正しいありかたとは生涯にわたって自己実現をはたさることであるといった教訓的人生論になりかねないのである。抽象的な規準や目標は、陰にみえた餅のようなものである。

青年期の自己実現

批判的なことを述べたものの、マズローの規定のしかたを否定するものでなく、むしろ教育上の指導理念としての価値は高く評価するものである。ただ、それだけの情報を得ただけで、人間ひとりひとりが、欲求のままに自己実現できるわけ^はなく、ひとりだちするためにもなんらかの働きかけをする媒体が必要ではならない。その媒体とは、青年にとっての親であり教師であり、それに応ずるカウンセラーであり、さらにはそのような役割を果しうる人々たちである。

自己実現の欲求が青年期において著生えるならば、その芽生えを読みとり成人（おとな）として社会的責任を果しうる自律性を獲得できるように働きかけ（媒体）は役割担^担手期に置かれている青年にとって一層その必要性が増大するであろう。

不確実性の時代ともいわれ現代においては、現実的な価値は多様であり流動的である。欲求充足も派別的、不安な安定性を保っているわけではなく、それだけに自立しうる自己実現能力が要求される。そこには普遍的価値基準の提示、具体的な価値への読みみえでなく、積極的な働きかけをなんらかのプログラムによって行なわれることが必要である。自己実現を目標とするには、そのためのプログラムが準備されているなければならない。それは媒体の恣意性に依存することによって打倒できない。しかも、いつまでも媒体に依存するような働きかけは、結果的に自己実現を他律的なものにもし兼ねない。ここに人間形成における自己実現の具体的な課題がある。

自己実現の空転

この6月、大学1・2年次の男女学生にいくつかのアンケートを試みてみた。（162名）
「自己実現」という用語を知っていたもの

は約半ほどであったが、この用語についての解説や意義について説明をうけていた者は3割、全体の10%にすぎなかった。

この1割の学生も大学で青年心理学で聞いた程度のもので大部分で、記憶が具体的なものは殆どいなかった。自己実現を意識的にも、生活面でも内面化している者は皆無といつてよい。だからといって彼等が自己実現を目指していないということではな

ない。たゞいえることは、彼等によって高校段階の青年について一般化できるとしたら、青年にとっては、自己実現は目標としても、欲求の自覚レベルとしても定着していないといふことであ

ろう。このことを端的にいえるなら、自己実現は現代の青年にとってそれなりの役割も果たしているのである。われわれがことあげするほど、自己実現は、青年にとっての人間形成目標、人生論的な面や日常生活のなみで市民権を獲得していない。それどころか、バンド・ワゴンにすらなっていないといふことである。

一面には、この自己実現を青年に定着させる契機が社会的に存在していないということもあるが、当初に指摘したように、自明の理として青年の生活の外側にあるものように考え、人間形成に働きかけるに足る作用が自己実現の概念のなみに内在していない空概念にとどまっているところにも問題があると思う。

自己実現の基準を教育の目標とし、それだけで前提としている欲求の充足が青年にとって可能であるとするところにも問題の背景がある。人間形成の過程のなみに自己実現のシステムを組みこむことは、自己実現への働きかけであろう。このシステムとして自己実現を再構築すること、働きかけのプログラムということになる。

＜要時間関係性的自己実現に向けて＞